



対策の徹底と早期通報

高病原性鳥インフルエンザの対策ポイント

渡り鳥の飛来が始まる秋以降の高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) 発生リスクに備えて、農場では適切な対策の実施が求められる。今号は、HPAI対策のポイントを紹介する。

昨年度から今年度にかけての国内外HPAI発生状況

2018年度、国内では家きん・野鳥ともに高病原性鳥インフルエンザ (HPAI)*は発生しなかった。しかし、国内5地点で野鳥(糞便や死体を含む)から低病原性鳥インフルエンザ (LPAI)が検出されており、渡り鳥によってウイルスが持ち込まれていたと考えられる。

2019年9月上旬時点の日本周辺国におけるHPAI発生状況は以下の通り(OIE報告ほかより)。

韓国では家きん、野鳥ともにHPAIは発生していないが、2018年10月～19年1月にかけて野鳥からLPAIあるいは病原性未同定 (HPAIではない)が計58件検出されている。

全農家畜衛生研究所 研究開発室

中国では18年9月～19年5月までに計10件の家きんHPAIが発生している。

台湾ではHPAI (H5N2)が常在化し、年間を通して家きんHPAIが発生している。

野生動物・野鳥対策

近隣に水辺(池、沼、川)が存在する農場でHPAI発生リスクが高まる理由として、水辺に飛来した渡り鳥から農場付近の野生動物・野鳥にウイルスが伝播し、これらが農場内にウイルスを持ち込む可能性が考えられる。また、過去にHPAIが発生した鶏舎の壁や天井には、野生動物・野鳥が出入り可能な「隙間」が多くの事例で確認されている。多様な野生動物・

野鳥が農場内に侵入している一方で、飼養者はその侵入を認識できていない場合が多い。

これらの対策として鶏舎や防鳥ネットを定期的に点検し、破損箇所を速やかに修繕する必要がある(写真1、2)。渡り鳥対策として水辺に忌避テープや防鳥ネットを設置する事も効果的である。

人・車両・資材・水の対策

農場周辺に存在するウイルスが、人・車両・資材・水に付着して農場内や鶏舎内に持ち込まれる可能性がある。対策例(表)にある通り、飼養衛生管理基準に基づき、各農場で持続可能な対策方法を策定して、農場関係者全員に周知・徹底する事が重要となってくる。

早期通報が重要

あらゆるHPAI対策を実行したとしても、発生リスクをゼロにする事はできない。万が一、HPAIを疑う状況に遭遇した場合、管轄の家畜保健衛生所への早期通報が蔓延防止につながる。HPAIの臨床症状には、突然の死亡率上昇や元気消失、産卵異常、チアノーゼなどがある。常日頃から飼養鶏の健康観察に気をつけていただきたい。

写真1.防鳥ネットと屋根の隙間

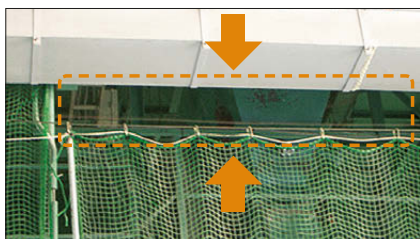


写真3. HPAI発症死亡鶏



写真2. 鶏舎の壁の穴



表.主な高病原性鳥インフルエンザ防疫対策

① 野生動物・野鳥の鶏舎への侵入防止及び給水源への接近防止
② 水道水以外の水を給与している場合の飲水消毒
③ 農場出入り口に踏込消毒槽を設置、農場周囲に消石灰を散布
④ 農場への部外者の立入制限、出入りする車両の消毒
⑤ 農場従業員等の衣服・靴の交換、手指の消毒
⑥ 飼養鶏の健康観察の徹底(写真3)
⑦ 海外渡航時の防疫注意